

創刊のことば

著者	梅棹 忠夫
雑誌名	国立民族学博物館研究報告
巻	1
号	1
発行年	1976-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10502/2635

創刊のことば

国立民族学博物館が一つの制度として発足して以来、すでに一年半たった。そのあいだ、たくさんの人たちのご支援とご協力をえて、まずは順調に成長することができたかとおもっている。建物は現在工事中で、展示を完成し一般公開できるところまでもってゆくには、まだ二年ちかくかかる予定であるが、すでに館員の数は現在60人、昭和51年度中には90人に達するはずである。各種の委員会などの諸制度もおいおい整備され、研究陣も専任教官のほかに多数の併任教官の発令によって強力なサポートがえられるようになった。

このように、研究体制はかなりの充実をみせ、研究スタッフの意気も高揚をつづけた結果、研究成果のとりまとめ作業もおいおいと完成をみて、ここによく『国立民族学博物館研究報告』の第1号を刊行することができるようになった。今後は、定期的に、年間4冊の『研究報告』を出版するつもりである。

しかしながら、研究体制はととのいつつあるとはいえ、研究機関としてのわが博物館は、まだまだ未完成であり弱体である。この研究報告書の出版をもって、創設以来のわれわれの研究成果を世にとり、というほどの気おいはまだない。内容的にも、それぞれの執筆者の赴任前からの継続的研究がおおく、わが博物館の独自の成果をまとめた形でうちだすにはいたっていない。形式的にも、いまだ試行錯誤をつづけねばならぬ点もおおく、学術刊行物として成熟した体裁のものをつくりだせたいとはいえない。

しかし、この種の研究施設としては、研究とその成果の刊行こそは、第一義的な仕事であり最高の義務であると、わたしどもはかんがえている。困難を克服しつつ、研究内容を充実させ、りっぱな報告書が出版できるようになるまで、館員一同、努力をおこたらぬ覚悟である。

この研究報告は、定期刊行物とはいえ、博物館の研究業務の報告書という性質上、一般の寄稿をうけ自由な購読をみとめるところの公開言論機関ではないけれど、刊行者としては、むしろできるだけ公器性をたもってゆきたいとねがっている。この博物館自体が国立大学共同利用機関として創設されたものである。この研究報告も学界の共同の関心と利益にそうよう、できるだけ努力をしてゆきたい。

この刊行物を手にされた館外の同学諸氏におねがいます。わたしどものこのささやかな刊行物が、りっぱに成長して、わが国の、そして世界の民族学の発展のために、いささかの貢献をなしうるものとなるように、きびしいご批判とあたたかいご協力とをたまわりたい。館員一同、それを熱望してやまない所である。

1976年3月

国立民族学博物館長

梅 棹 忠 夫